



北・その自然と人

札幌市博物館活動センター情報誌 ミューズ・レター

Muse Letter

札幌市博物館活動センターは自然系総合博物館の計画推進のため、市民とともに教育普及活動、展示・交流、調査研究、資料収集保存を行う活動拠点です。

2012. 12 No.51 発行・札幌市博物館活動センター

〒060-0001 札幌市中央区北1条西9丁目 リンケージプラザ内5階

TEL 011-200-5002 FAX 011-200-5003 http://www.city.sapporo.jp/museum/

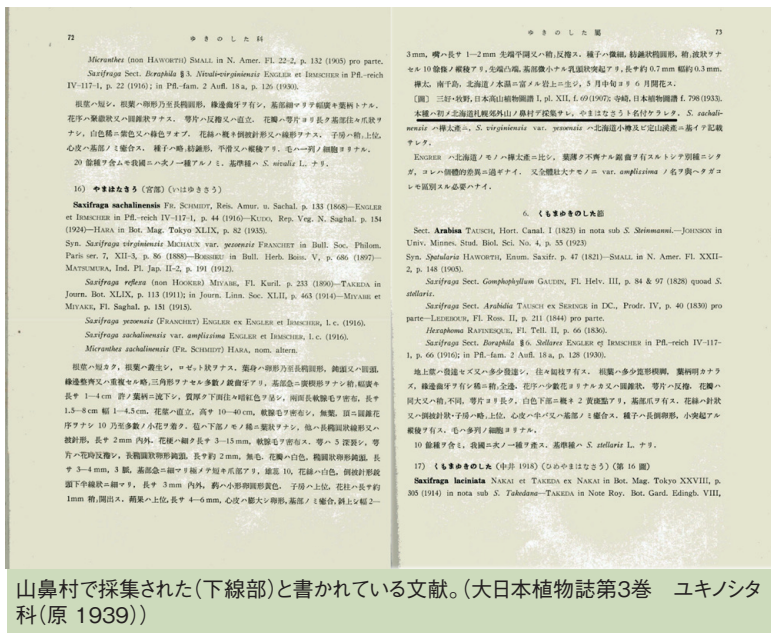
山鼻の地名がついた花

今はもう、山鼻という住所はありません。しかし、山鼻地区といえだいたいの辺のことを言っているのか想像できる方が多いのではないのでしょうか。山鼻地区は明治4年に現在の伏見に本州からの入植者が入り、「本願寺道路」(今の国道230号線)ができて早くから市街地が開けた地区です。今でも小学校や町内会

の名前に「山鼻」という名前が残っているほか、ヤマハナソウという名前がついた植物もあります。

生き物の名前に地名がついていると、その地域にしか生息しない固有種かと思われがちですが、ヤマハナソウは山鼻付近(藻岩山)のほかにも北海道内各地の山の岩場に生えています。ただし、日本では北海道にしか生えていません。世界では北海道のほかに、サハリンや千島列島から北アメリカ大陸に分布しています。

では、なぜこの植物に山鼻という地名がついたかということ、日本で最初に発見された場所が山鼻村だから、と言われて



山鼻村で採集された(下線部)と書かれている文献。(大日本植物誌第3巻 ユキノシタ科(原 1939))

います。果たしてその証拠といえる物、つまり標本は残されているのでしょうか?この冬、山鼻南小学校で南区の自然について小さな展示することになり、ヤマハナソウについて文献や標本を調べ始めました。その中で、ヤマハナソウの“名づけ親”は北海道大学農学部教授だった宮部金吾博士のようだとわかってきました。予想ですが、宮部博士はこの植物を軍艦岬や割栗岬といった登山道や市街地近くの岩場で見つけたでしょう。明治時代に宮部博士が山鼻付近で初めて採集した標本を探し出し、展示でお見せすることができれば、「本当に山鼻で初めて発見されたんだ!」と納得してもらえます。そこで、宮部博士に縁のある北海道大学総合博物館や植物園で標本を探しました。しかし、探している条件にあてはまる標本はありませんでした。もしかすると、本州にいた研究者に標本を送った可能性もあります。

標本は地域の自然やそこに関係した人について、様々な情報を教えてくれる物証であり、過去から現在、そして未来の自然環境を予測する貴重な資料にもなります。しかし、植物標本はカビで傷んだり、虫に食べられたり、災害で消失したりすることがあります。そうしたアクシデントにも備えて、当センターでも同じ種類でも複数の標本を保管しておくようにしています。(文・写真:山崎)



ヤマハナソウ

1878年(今から134年前)に札幌で採集された標本。この標本の採集者は宮部博士ではない。(収蔵:北海道大学総合博物館植物標本庫)

「博物館」を意味する英語Museumの語源であり、喜びを表すmuse(ギリシャ語)と通信や手紙を意味するLetter(英語)からMuseLetterと名付けました。

連載!

札幌っ子 大杉解説員の 心のスケッチブック

Page3

札幌にもあるミカンの仲間

展示解説員になる前、私の仕事は小学校の図書室で子供達の調べ物の支援をすることでした。ある時、5年生の子から「ミカンの木がいっぱいのっている本はないの?」と聞かれ、「北海道なのにどうしてミカン調べているんだろう?」とずっと疑問に思っていました。それは、私の”ミカン”のイメージは温暖な所に生育し、北国では育たないと思っていたからです。



キハダの葉と果実。(画:大杉あい)

しかし、札幌にもミカン科の木があることをご存知でしょうか? 私が思い描いていたミカンは、ウンシュウミカンやハッサクで、こちらは温暖な地域に

生育している木なのですが、キハダ、サンショウといった“ミカン”と関係ないと思える木もミカン科であり、北海道でも見ることができるのです。サンショウは、ウナギのかば焼きにふりかける香味としてご存知の方も多いかと思えます。しかし、もう一方のキハダはどんな木なのかピンとこない方も多いのではないのでしょうか?

キハダはオスとメスの木が別々にあり、高さは10~20mにもなる大きな木です。熟すと黒くなる直径1cmほどの実がブドウの房のように集まって付き、とても“ミカン”の仲間とは思えない姿をしています(イラスト)。そして、隠された特徴は幹の一番外側のかたくてゴツゴツした樹皮をはがすと見えてきます。キハダの幹の内側には、鮮やかな真っ黄色の層(内皮)があるのです。この黄色の層は草木染めの材料になるほか、漢方薬でも使われるそうです。

当センターにもキハダの丸太があります。これは2004年9月の台風で沢山の木が倒れたとき、体験学習会などの教材として山崎学芸員がもらってあったものです。丸太は乾燥させるためにセンター内の片すみに置かれていましたが、今後の行事等で使えないかと考え、スタッフで草木染めの試作を行いました(写真)。白い布を染めると、ミカンの実の黄色かと思う位きれいに染まりました。

キハダは札幌の森林にも生えています。小さくて丸い黒い実が落ちていたら、キハダの木が近くにあるかもしれません。ぜひ探してみてください。

絞り染めのTシャツづくり



内皮を煮て、色を出します。



染める物(布など)を入れます。



試作した絞り染めのTシャツ。少し色がまだらになってしまいました。

参考図書：山溪カラー名鑑「日本の樹木」(林弥栄著、2001年刊)、「新版 北海道の樹」(辻井達一・梅沢俊・佐藤孝夫著、1992年刊)